

# COVID-19拡大抑止に配慮したフィールドトリップの実践 —出雲大社、石見銀山、萩と津和野を巡る2021(令和3)年度 「地理学研究」の覚え書き—

香川貴志<sup>\*1</sup>

Practice of Geographical Field Trip under the COVID-19 Expansion  
Restraint: Memorandum from Visiting Izumo-Taisha Shrine,  
Iwami Silver Mine, Hagi and Tsuwano

KAGAWA Takashi

抄録：本稿は、2021(令和3)年度の前期集中講義として実施した学部開設科目「地理学研究」と大学院開設科目「地理学特論Ⅱ」の備忘録である。このうち事前学習については別稿(香川, 2022a: 2022b)で詳述したので、本稿では事前学習のアウトライン、及び現地授業と事後評価についてまとめる。教育現場で頭痛の種となっているCOVID-19(新型コロナウイルス感染症)への対応は、前年末のシラバス設計の段階から留意しておく必要があった。ただ、授業設計段階から工夫を施せた点は、香川(2021a: 2021b)でまとめた前年度の類例に比べて幸いであった。

キーワード：世界文化遺産、重要伝統的建造物群保存地区、出雲大社、石見銀山、萩、津和野

## I. 本研究の目的と対象地域の決定

筆者は、奇数年に学部授業「地理学研究」と大学院授業「地理学特論Ⅱ」、そして偶数年に学部授業「地理学特講」と大学院授業「地理学特論Ⅰ」を担当している。いずれも現地授業を伴う科目で、インテンシブなフィールドワーク(以下の本文中ではFWと記す)を行うこともある。

こうした宿泊を伴う実地授業は、2022年度から高等学校地理歴史科において必修科目となる「地理総合」を視野に入れると等閑視できない大切なものであると筆者は考えている。なぜなら、地理教育界で頻繁に指摘されるコンピテンシー重視の能力開発、すなわち地理的な見方・考え方の錬磨が、初等教育(小学校教育)や中等教育(中学校教育と高等学校教育)のみならず、高等教育(大学・大学院教育)に至るまで、校種を問わず強く要請されるからである。

宿泊を伴う現地学習では、常住地とは異なる環境の下で現地観察や現地調査が可能で、新鮮な気持ちでFWを経験できる。また、教員を志す学生にとっては、林間学習や臨海学習、そして修学旅行の学校行事を企画立案する際の参考になることも期待できる。

授業の成果を実のあるものにするには、周到な事前準備や事前学習、無駄なく効率的な現地行動、現地で得たことを表現する事後教育の3者が大切である。しかしながら、これらは克明に書き留めておかないと数年のうちに単なる思い出となり風化する。そこで、宿泊を伴う各校種の宿泊行事、

<sup>\*1</sup> 京都教育大学、同附属桃山小学校(併任)

そして大学での地理学フィールドトリップの設計と実施の参考に資するよう備忘録をまとめることが本稿の目的である。これは筆者が担当した実施済み類例の目的と同一である。

ところで今年度は、シラバス設計時点から COVID-19 拡大抑止への配慮が必要で、とくに昨年度の経験から宿泊先はシングルルームの確保が不可欠であった。そのため、シングルルームが少ない島嶼や観光地では実施自体が難しく、訪問地を選定する際に大きな制約が生じることとなった。候補地は2つあり、一方は今回の訪問地、他方は小豆島だった。後者については前年度後期開講の大学院授業で下見を兼ねた訪問を企画していたが、折からの COVID-19 の感染状況の深刻化が進んだことから現地機関との調整が難しくなり、結局のところ現地訪問を中止して、成績評価に際しては代替課題による単位認定を余儀なくされた。

この大学院授業において、島全体が観光地といっても過言ではない小豆島では、シングルルームの確保が極めて難しいことが判明した。そこで、今回は 2010（平成 22）年度の「地理学特講」で訪問したコースに出雲大社を加えた逆回りコース（出雲大社→石見銀山→萩→津和野）とした。宿泊地は前後の行程の結節点として利便性に優れる益田市に定め、当地で連泊することにした。このコースは 2010 年度に大変好評だったことも再訪を決めた一つの要素である。

## II. 受講者の選定・決定

前年末の 12 月に作成したシラバスでは、COVID-19 拡大抑止の観点から「地理学研究」（学部開講科目）の定員を 18 名、「地理学特論Ⅱ」（大学院科目）の定員を 4 名と明記した。これは学部と大学院を合わせて満員の 22 名になっても、現地授業で大型バス（補助椅子を使わない一般座席定員 45 名）を借上げる必要が生じた場合でも、引率者（筆者）と参加者全員が互いに離れて着席できる 23 名を上限に設定したためである。

新年度早々に始まった受講登録は、数年前から希望者が教務システム上で入力するよう指示しており、定員を満了した段階で自動的に本授業科目の登録ができなくなる。学部科目の「地理学研究」は受付開始から間を置かず定員の 18 名に達し、教職免許取得要件を満たす科目として当科目の受講を希望していた教育学専攻の卒業該当回生の学生 1 名が登録できなくなった。他方、大学院科目「地理学特論Ⅱ」は定員 4 名に対し 1 名だけが登録していた。そこで教務課教務グループに依頼して「大学院への提供枠が定員に満たない場合、余剰数を以て学部の希望者に受講を認める。ただし受講生の選考に際しては、卒業該当回生を優先し、人数超過の場合は乱数表を用いて選別する。」との広報を出してもらった。

結果として、上記の教育学専攻の学生だけが追加登録の希望者となったため受講を認め、「地理学研究」と「地理学特論Ⅱ」を合わせた受講生は 20 名となった。その内訳は、障害児教育専攻の大学院 2 回生の女子 1 名、教育学部では教育学専攻の 4 回生男子 1 名（後日自己都合により受講辞退）、理科領域専攻の 4 回生男子 1 名（教員採用試験二次試験との日程重複が後日判明したため現地実習に代える課題で成績評価）、国語領域専攻の 3 回生男子 1 名、社会領域専攻 3 回生の男子 11 名（うち 1 名が後日家庭の事情により現地実習に代える課題で成績評価）と女子 4 名、体育領域専攻の 3 回生男子 1 名である。

最終的に現地実習に代える課題で評価した者 2 名を含む受講生は、学部 18 名、大学院 1 名とな



った。現地実習の参加学生は学部16名、大学院1名である。引率者である筆者を含めて総勢18名の現地実習の陣容は「密」を避けて現地説明ができる点で好ましい規模であると判断できる。

### Ⅲ. 事前学習会

本授業科目は前期集中の2単位科目であり、その総時間数は15コマ(30時間)である。ただ、教員養成課程では必須の教育実習関係の授業や教員採用試験との関係で、前泊を伴う3泊3日の日程(授業は2泊3日)が精一杯という制約がある。そのため、地理学のFWでは不可欠なデスクワークを事前学習に取り入れて時間数を確保している。今年度は、前泊を経た翌朝に現地(出雲市)で集合して第1日目に5コマ(10時間)、第2日目に5コマ(10時間)、第3日目に2コマ(4時間)の行程を組んだ。したがって、事前学習会は3回実施で設計し、各回を1コマ(2時間)とした。各々の事前学習会では、可能な限り同一教室で実施できるよう教務課に教室手配を依頼しているが、今年度は幸い全回とも同一の講義室を確保できた。以下の本章では、第1節で文献要旨をまとめる作業の概要を記し、第2節以下で各回の事前学習会の内容を概説する。

#### 3.1 文献要旨をまとめる作業の概略について

今年度の本授業科目は、全体の行程との関係から出雲市または松江市などで前泊し、電鉄出雲市駅で朝に集合するという行程を組んだ。そのため、1日目が5コマ(10時間)、2日目が5コマ(10時間)、3日目が2コマ(4時間)という総計が12コマ(24時間)の現地授業となった。単位数2の科目なので、指定時間数は15コマ(30時間)が必要で、現地授業だけでは不足する3コマ(6時間)を事前学習に充当した。事前学習は1コマ(2時間)のものを3回実施した。実施日は5月15日(土)、7月3日(土)と7月31日(土)で、当初は全て食事を摂った後に指定教室(B5教室)で集合して、授業の狙いや現地授業の説明、文献精読の内容紹介と質疑などを予定していた。しかし、第1回事前学習会はCOVID-19拡大に伴う緊急事態宣言の発出などで対面形式での実施ができなかった。以下の本章では、各回の事前学習の概略を記す。

#### 3.2 第1回事前学習会(当初の予定:5月15日(土),12:00~13:30)

折からのCOVID-19の拡大状況が深刻で、連休直前の4月25日から5月11日までの期間を対象として東京都・京都府・大阪府・兵庫県の4都府県に発出していた緊急事態宣言は、事態の深刻化を反映して5月7日の発表により5月31日までの期間延長となった。そのため筆者は、授業担当者として5月15日に第1回事前学習会を開催できなくなり、緊急事態宣言の延長が確定的になった時点から、第1回事前学習会で配布予定だった資料類を急ぎ完成させる必要に迫られた。何とか配布予定資料が完成したのが5月8日の午前のことで、その最終チェックをしたのちに教務システムの「連絡通知」を活用して4点の書類を受講生に宛てて送信した。

添付送信した書類は、①第1回事前学習会の案内(実質的にはそれに代えた資料送付の案内)、②香川(2022a)の表1に示した、対象地域に関する文献の要旨執筆担当者の一覧表、③要旨をまとめる際のテンプレートを兼ねた文献表(香川(2022a, 2022b)の付録からKey WordsとAbstractの記載内容を除いた書誌情報)、④現地授業のスケジュール、これら4点である。

以上のうち、本来ならば③は受講生が作成すべき書類である。しかし、本授業科目の受講生の大多数は地理学を専門領域としない学生なので、対象とする文献の取捨選択の判断が難しくなると考えて、ここ数年は筆者がCiNiiを活用して対象文献を選定することになっている。作業の結果、精読を経て要旨をまとめる対象文献は、合計80件となった。

受講生には、自身が担当する文献のキーワードと要旨を上記③のテンプレートにまとめたうえで、7月15日深夜23:55までに筆者の大学メールアドレスまで届けるよう教務システムの「連絡通知」に記した。この期日は、提出された原稿の推敲作業に筆者が励み、その完成版である『文献要旨集』を製本して第3回事前学習会(7月31日)で配布するために要するギリギリの時間を織り込んで決めたものである。

ただ、受講生へ宛てて上述した①～④の書類を配布した直後、受講生の1名から突然に受講辞退の申し出が届いた。宿舍も4月末に予約済みであったうえ、香川(2022a)の表1によって担当文献が確定した後であったため強く慰留に努めたが、当該学生が4回生であることから、他科目を履修する負担を考えると、卒業予定者である4回生に授業担当者として受講を強要するのは不適切であると判断した。

受講辞退の申し出のタイミングは最悪に近いものの、本学が教員養成を旨とする大学である以上、教員採用試験の受験を最優先して対応すべきなのは仕方が無い。とはいえ、この点に関しては、受講登録時に相応の予見は可能なはずなので、次年度以降のシラバスでは「受講辞退の恐れがある者は当初より受講登録を慎むこと」などの強い要望を付記しておくべきかもしれない。受講辞退により生じた文献担当の穴は、一部の文献で担当者が受講生1名だけになってしまうが、受講辞退を受けての担当者の再編成は避けて、その穴を筆者が埋めることにした。

### 3.3 第2回事前学習会(7月3日(土), 12:00～13:30)

当初の予定では、第1回事前学習会で決めた担当に従って精読してまとめたキーワードと文献要旨について、各自の担当分から1点を選んで口頭発表してもらうことを計画していた。しかし、第1回事前学習会が上述のとおり対面実施できなくなってしまったため、文献要旨をまとめる作業の締切を7月15日に設定したことから、授業内容の予定を変更した。

変更した授業内容は、大学入学共通テストと類似した様式の地形図読図問題2題に取り組んで、その解説文を正答・誤答の全てについて記すというものである。そのための準備は連休直前に開始し、新旧地形図の図歴検索や発注を行った。新版は販売中の最新1/25,000地形図であり、旧版の1/25,000地形図は国土地理院で「地形図謄本」と呼ばれているものである。読図作業の他には、現地授業の際に使用するフィールドノートの配布、およびその使用方法の概説を行った。

筆者が作問して受講生に課した地形図読図問題の対象地域は2箇所である。一つは現地授業の1日目に訪問する出雲大社周辺地域であり、ここではJR大社線が記載されている旧図と現在の新図を比較しつつ解答に取り組んでもらった。もう一つは今回の授業では訪問しないが地形図読図問題で頻出する等高線について問いやすい木次線出雲根駅周辺地域である。この設問では、急勾配を克服するための鉄道や道路の工夫がテーマになっている。

鉄道では木次線の二段スイッチバック、道路については国道314号(広島県福山市と島根県雲南市を結ぶ一般国道)の「奥出雲おろちループ」がそれに該当する。いずれも地形図から標高や

地形を読み取る能力を測定できる。当初は現地授業で訪問する石見銀山、萩、津和野のいずれかでの作問を考えたが、新旧地形図の比較が困難（地図から読み取りやすい変化が顕著ではない）という理由から出雲坂根駅周辺を選定した。

事前学習会では、読図作業に先立って図1と図2の狙いを簡潔に説明した。そして、読図作業をしやすくするため、本誌の標準プリントアウト版に合わせてA4用紙に貼付した地形図原稿（図1・図2と同サイズ）をA3用紙に141%拡大した図面も併せて配布した。

ただ、地形図読図のうち1題の出題内容に誤りがあったため、この作業に関しては成績判定資料から除外した。なお、この読図作業に関わる修正済みの設問と解答・解説は教務システムを通じて後日配布した。次頁以降に収録した地形図読図問題（表1、図1、図2）および解答・解説（表2、表3）は修正済みのものである。

### 3.4 第3回事前学習会（7月31日（土）、12:00～13:30）

第3回事前学習会は、例年と同じく現地授業前に実施する最終回にあたる。したがって内容は、①7月15日を提出締切としてEメール添付で受講生から回収した文献要旨を筆者が推敲のうえ再編集した『文献要旨集』の配布と解説、②この『文献要旨集』を使った事前学習のまとめとなる課題の説明、③修正済みの地形図読図の解答・解説を使った講義、④本章2節に記載した現地授業のスケジュールを使った最終確認、⑤現地で要する費用（団体乗車券、見学施設への団体入場券、バス乗車料金、レンタサイクル料金、JR特急券など）の事前集金、以上の5点である。

また、第3回事前学習会の直後、今夏に教員採用試験の第一次試験を受験していた受講生のうち1名が第二次試験に進み、その日程が現授業の一部と重複したため、当該学生には現地授業に代わる課題を与えた。本学の場合、こと最終学年の学生が教員採用試験に臨む場合には、それを最優先する必要がある。さらに数日後、3回生男子学生から家庭の事情で現地授業に参加するのが難しくなったとの申し出を受けた。事情を尋ねると、救急医療に関わる職業に従事している両親が現地授業期間中、ともに出勤シフトを避けられないことが判明し、その間に小中学生のきょうだいの保護者として自宅に詰める必要があるということだった。この学生についても、上述の現地授業だけを辞退した学生と同様、現地授業の代替課題を与えて成績評価に臨んだ。

現地授業に行けなくなった2名に与えた課題は、本節で上述した②の課題における負担を少し重くしたものである。現地授業に参加することに比べれば負担は随分軽いものの、「やむ無く行けなくなってしまった」という立場の学生に過重な負担を課すことは憚られた。そこで「評価ランクが高い成績を与えるのは厳しいがそれでも良いか」と確認し、2名の学生がそれに同意したため代替課題での対応を決めた。当該学生が指定期日までに仕上りの良い代替課題を提出してくれたのは幸いであった。

この代替課題は、COVID-19の状況が過酷な状況に至って現地授業が出来ない場合に備えて設計した課題の一部である。他には、グーグル社によるストリートビューを活用した昨年と同様のバーチャルFWを石見銀山大森地区と津和野の2か所で企画していたが、感染症拡大防止策を徹底して現地授業に漕ぎつけることができ「お蔵入り」となった。



表1 地形図読図の模擬問題 (問1・問2)

問1 図1に示す新旧または片方の地形図の説明として適切でないものを①～④のうちから1つ選び、各選択肢の正誤判断理由を①～④すべてについて述べよ。

- ① 旧図の国道(314号)は「奥出雲おろちループ」の開通後も廃道にはなっていない。
- ② 「奥出雲おろちループ」の中にある「道の駅」から第三坂根トンネル南側入口を観ると見上げる状態になる。
- ③ 新旧両図にみられる木次線の出雲坂根駅付近にはスイッチバックが設けられている。
- ④ 三井野原駅と出雲坂根駅の駅間距離は6.4km(JR公式数値)なので、両駅間の平均勾配は25%(1kmで25mの高低差)となる。

問2 図2に示す新旧の地形図の説明として適切でないものを①～④のうちから1つ選び、各選択肢の正誤判断理由を①～④すべてについて述べよ。

- ① 旧図にみられる国鉄(現JR)大社線の跡地の一部が道路となった。
- ② 新旧両図の南半分では梨を栽培する果樹園が水田よりも多い。
- ③ 旧図の出雲大社の南東約400mの空き地に博物館が建設された。
- ④ 旧図の「たいしゃまえ」駅の南南西約400mの町役場跡付近に図書館ができた。

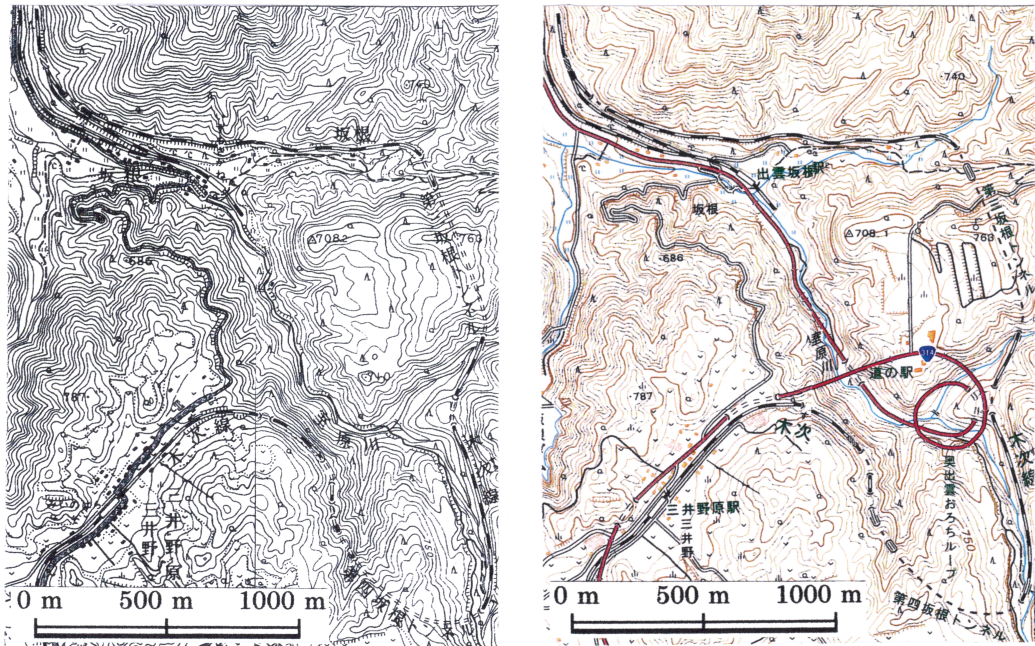


図1 出雲坂根駅周辺の新旧地形図(左図:旧図,右図:新図)

資料: 1/25,000 地形図「多里」(旧図: 1976. 11. 30 発行, 新図: 2019. 7. 1 発行)

1/25,000 地形図「下横田」(旧図: 1976. 11. 30 発行, 新図: 2018. 5. 1 発行)

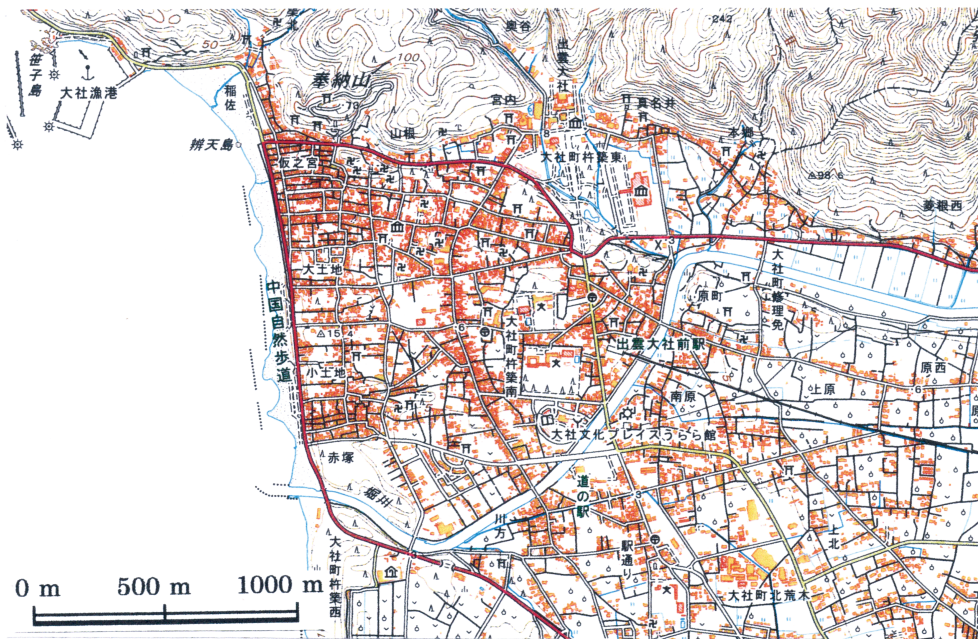


図2 出雲大社周辺の新旧地形図(上図:旧図, 下図:新図)  
 資料: 1/25,000 地形図「大社」(旧図: 1987. 2. 26 発行, 新図: 2017. 5. 1 発行)



表2 地形図読図の模擬問題（問1）の正解と各選択肢の解説例

## 解説（問1）

この設問は各選択肢とも交通の勾配克服がテーマとなっている。等高線から高度差を読み取ったり、谷と尾根を判別したりする作業は地形図読図問題の頻出事項であり、十分に慣れておくことが大切である。そのコツは、三角点・水準点・標高点などと計曲線（1/25,000地形図の場合は50mごと）を併用し、山頂や河川との関係から谷筋と尾根筋を見出すことに尽きる。不慣れな人からは、頻繁に「尾根と谷の区別ができない」と相談を受ける。これは、ミルフィーユケーキを谷状に削ぎ取って食べた時にケーキの層序がどのように見えるかをイメージすれば一気に解決できる。以下、正解と解説を記す。

## 【正解】②

- ① 旧図の国道314号はこの区間の急勾配を上下するのに急峻なルートであった。安全で円滑な道路通行を実現するために室原川の谷部に「奥出雲おろちループ」が完成したのは1992（平成4）年で、国内では珍しい二重ループとなっている。これにより克服される標高差160～170mを地形図の等高線から読めるようにしておきたい。正しい記述なので正解ではない。
- ② 新図に描かれた「道の駅」の標高は、周囲の標高点や等高線を参考にすると約690mであると分かる。標高を把握する鍵は、ところどころに明記された計曲線（太い等高線）の数値が基準になる。一方、第三坂根トンネルの南側入口は、やはり等高線を迎えることによって約660mであることが分かる。よって、選択肢の記述は「見上げる」の部分が誤りであり、これが設問の正解となる。
- ③ 出雲坂根駅は交通工学の世界では広く知られた、2度の方向転換を要するスイッチバックがみられる。この方式は、急勾配の克服に一定の効果がある一方で、速度向上や編成両数の制約などの難点も抱えている。かつて、広島～松江・米子を結んだ準急や急行も長大編成を組むことができず、多客時には混雑を余儀なくされた。正しい記述なので正解とはならない。
- ④ この区間の木次線はループこそ無いものの、大きく屈曲したルートで急峻な地形を克服している。地形図の等高線（50mごとに記された計曲線と10mごとに記された主曲線）を慎重にたどれば、三井野原駅の標高は約730m（JR西日本公式データでは727m＝同社で最高地点の駅）、出雲坂根駅の標高は約570mである。従って $(730-570)/6.4=25$ となり、選択肢の記述は正しい。したがって正解には選べない。

前頁と前々頁に見開きで示した図1（出雲坂根駅付近の新旧地形図）と図2（出雲大社付近の新旧地形図）の正解および各選択肢の解説を、図1については表2、図2については表3にまとめた。既述のとおり、図1では等高線の正確な読み取りを目標にしており、図2は大学入試や教員採用試験で頻出する新旧地形図の比較検討が目的である。これらの読図課題は7月3日に実施した第2回事前学習会で取り組んだ。後ほど問2で正解が複数となる出題ミスに気付いたため、本稿に収録した修正済みの設問と解答・解説を教務システムで受講生へ伝えた。

この解説については、昨年度に木曾地域で実施した授業の際は、第2日目にフィールドへ向かう移動途中に列車内で配布した。しかし、本年度は交通機関での移動中に景観観察をさせた方が教育的効果に優れると考えたため、さらに車中での解説はコロナ禍の下では口頭説明ではなく書面による説明に依存せざるを得ないことから、上述した事前配布のスタイルをとった。

表 3 地形図読図の模擬問題（問 2）の正解と各選択肢の解説例

## 解説（問 2）

等高線を読むことが主題になっている設問とともに、都市的地域と農村的地域がコンパクトに併存している地形図は、都市化などの地域変化を主題とした設問が頻出します。今回の授業の現地行動で最初に訪問する出雲大社周辺の様子を地形図の読図によってあらかじめ知っておきましょう。地理学のフィールドワークでは、現地訪問に先立って地形図等で予察的なデスクワークを行うのが通例です。

## 【正解】②

- ① 旧図に描かれた国鉄（現JR）大社線の跡地は、「たいしゃ」駅から少し離れたあたりから新図では道路となっており、この選択肢の文章の記述は正しい。よって、正解ではない。なお、かつての大社線は出雲大社への参詣客が多く、東京や大阪との間に直通急行列車が設定されていた。
- ② 果樹園の地図記号はリンゴを図案化したもので、栽培されている果物の種類までは特定できない。たとえば「次に示す長野県の地形図をみて・・・」という問いかけがなされて「○○周辺の果樹園ではリンゴが栽培されている」との記述があっても、その正誤は不明である。事実、長野県はブドウやモモの生産も多い。この地形図の範囲では隣県に鳥取県があるため、「釣り」で梨としたが、島根県の梨生産は統計に計上されないほど少なく、図中で果樹園の記号があるところでは食用やワイン醸造用のブドウが栽培されている。果物が梨であるとは断定できず、この選択肢が正解となる。
- ③ 旧図では空地（荒地や広葉樹林）であった部分は、新図では比較的新しい地図記号の博物館がみられる。この博物館は現地行動の初日、出雲大社に続けて訪問・入館する予定の島根県立古代出雲歴史博物館である。地図からも相応の規模の建物であることが分かる。記述は正しいので正解にはならない。
- ④ 地形図記号では○で示される町村役場が旧図では確認できるが、新図ではその位置に図書館（書籍を開いた状態を図案化）や文化センター（記号なしで文字名称のみ）が立地している。これは、大社町が出雲市に合併されたのを機に整備された一種の文化ゾーンである。このように公共施設の跡地では、公的サービスの低下を招かないように、別の公共施設を建設する例が全国各地で多くみられる。記述は正しいので正解にはならない。

第 2 回事前学習会で提出された解答・解説を後日精査してみると、正答率は問 1 で 8 割を超えたのに対し、問 2 では 2 割に満たなかった。問 1 に関しては、全ての誤答が等高線の読み違いに起因していたが、問 2 の正答率があまりに低いため、筆者が自身で作問した設問を見直して出題ミスに気付いた。問 2 では、果樹園の地図記号を短絡的に梨園と判断しないよう注意を促すことが狙いである。地形図の読図は、2022 年度から高等学校の地理歴史科において必履修科目「地理総合」が始まるものの、各校で地理を専門とする教員が不足しているのは自明であるため、教員採用試験で地形図の読図問題が現在に増して頻出することが予想できる。

とくに地理歴史科教員を多く輩出する文学部や教育学部（文系）では、高等学校で「地理 B」はおろか「地理 A」でさえ履修していない者が多く入学しているのが実情である。こうした地理教育上の難点を踏まえると、地形図の読図能力を向上させる大学教育が急務である。

### 3.5 予備調査

筆者は現地授業を伴う授業の際、必ず直近1年以内に現地で予備調査をすることにしている。つまり、文献やWeb情報だけで現地授業には臨むことはない。ただ本年度は、コロナ禍という社会情勢に鑑みて直前の予備調査を自粛した。もっとも、出雲大社周辺と石見銀山については昨秋に私用で訪問して確認できていたため、宿泊地となる益田では宿泊先のホテルで周辺事情を伺い、萩と津和野については訪問予定先と電話やEメールを使って入念な打ち合わせを行った。

その結果、直前になって石見銀山へ向かう拠点となる大田市駅に十分な数のコインロッカーが無いことが分かり（2010年の訪問時には駅前に手荷物預かり所があった）、大田市駅の観光案内所で相談した。それを受け、石見銀山の中心集落にあるレンタサイクル店で手荷物の一時預かりをしていただく交渉に臨み、ご厚意に甘えることができた。

## IV. 現地授業

本章では、2021年8月19～21日に実施した現地授業を行程に従って記述する。今年度は盆休み最中の週末（2021年8月13～15日）に西日本各地で大雨特別警報が発令され、斜面での土砂崩れや河川氾濫が生じた。また、東京オリンピックの閉幕に歩調を合わせたかのごとく全国的にCOVID-19の爆発的拡大が起こり、現地授業の実施に暗雲が立ち込めた。しかし、昨年度の経験を踏まえて今年度は感染拡大防止のための留意事項を受講生に事前学習会で配布しており、それを訪問予定機関や大学へ提出していたため、何とか現地授業に臨むことができた。

受講生に伝えた留意事項は、①出発2週間前からの毎朝の検温と健康観察（事前学習会で配布した記入シートを集合時に提出させる）、②出発2週間前からの不要不急の外出自粛と外食禁止、③現地と出発地との往来および現地の公共交通機関の車中での飲食と会話の禁止、④夕食と朝食は全て宿舍の自室（全てシングルルーム）内で摂り他の部屋との往来は厳禁など、自由を束縛するほどの厳しい規律のもとで現地授業に臨むことにした。

### 4.1 第1日目（8月19日（木）、大田市の最高気温31.3℃、14:20）

今回は電鉄出雲市駅に8:15集合だったため、やむなく前泊を要した。この日の当初計画は次のようなものであった。

電鉄出雲市 8:30（一畑電鉄）8:38 川跡 8:42（一畑電鉄）8:53 出雲大社前、出雲大社門前町、出雲大社、古代出雲歴史博物館見学、出雲大社前 11:16（一畑電鉄）11:27 川跡 11:32（一畑電鉄）11:41 電鉄出雲市、出雲市（JR）12:11（普通）12:55 大田市 13:07（石見交通バス）13:40 世界遺産センター、同館見学、世界遺産センター 14:46（石見交通バス）14:51 大森（レンタサイクル=電動アシスト）大森集落および龍源寺間歩、清水谷精錬所などを見学、大森 16:53（石見交通バス）17:19 大田市 17:38（スーパーまつかぜ7号）19:04 益田

上記の行動では、団体乗車券や団体入場券を活用して、可能な限りの経費節減を図った。しかし、上記の予定は前日の正午頃に国道9号の路肩と斜面が崩落し、並走する山陰本線の江南～田儀の区間が不通となり、筆者は前泊していた出雲市内のホテルから貸切バスの手配に奔走することとなった。幸い大型の貸切バスが手配でき、正午過ぎに貸切バスで出雲市駅前を出発して、石見銀

山世界遺産センター、重要伝統的建造物群保存地区（以下では重伝建地区と記す）に指定されている大森地区を見学し、同じバスで大田市駅まで運んでもらった。ただ、山陰本線の特急が運休していたため、普通列車を乗り継いで益田へ向かう必要が生じた。

ところで本授業科目では、受講生が漫然と地域を歩いたり物見遊山的な行動をとったりしないように現地課題を毎日与えている。この日は、「石見銀山の更なる活性化のための提案」をあらかじめ配布した400字詰原稿用紙1枚（学籍番号と氏名は枠外に記入し、表題は不要）を与え、これを現地課題①とした。この現地課題①は、後述する現地課題②と合わせ第3日朝に回収した。

益田到着後は、駅から至近の宿泊先に向い、ロビーでの密集を避けるため屋外で翌日の予定を伝えた。学部生にはその場で留まるよう指示して、筆者が支払いを済ませてから部屋の鍵を受け取り、ホテル従業員と大学院生の協力を得て各学生に鍵を渡した。

#### 4.2 第2日目（8月20日（金）、萩市の最高気温29.4℃、15:10）

第2日目は、不要な荷物を各自の部屋に留置し、身軽な状態で終日にわたり萩での行動となった。ホテル前に8:35に集合した当日の行程は次のようなものである。

益田7:50（普通）9:19萩、萩駅前9:42（市内巡回バス）9:47萩バスセンター（徒歩）萩・明倫学舎見学＝木造の旧・明倫小学校を活用した博物館（一時解散して以後は「萩でのハーフデイトリップ」を設計・実践するFW）～東萩駅で16:40集合、東萩16:58（普通）18:10益田

しかし、COVID-19 拡大抑止の観点から萩・明倫学舎と萩博物館へ団体入場できないこと、山口県内の多くの施設が県外客に來訪自粛を要請しているとの情報を得て、萩バスセンターで一時解散することにした。

幸いにも萩・明倫学舎と萩博物館は、県外客でも個人や小グループ単位では見学できたため、受講生には前日のホテル前でのミーティングで予定変更を伝えた。もちろん、主要施設には本学の学生が2週間前から感染抑止対策を徹底していることを筆者が事前連絡しておいた。

この日のフィールドでの課題は、各自が萩でのハーフデイトリップを設計し、それを現地フィールドで実践することを経て、その記録を提出させた。受講生が設計・実践したコースをみると、全員が萩・明倫学舎と萩博物館、歴史上の人物にゆかりがあり重伝建地区に指定された武家屋敷地区を見学しており、ごく一部を除いた大多数の者が松陰神社・松下村塾を訪問していた。この傾向は、2010年に萩で同様の課題を与えた結果（香川：2011）に類似している。その他の訪問地では、重伝建地区に指定された浜崎地区、世界遺産の構成要素となっている萩反射炉、観光施設を兼ねた魚市場「シーマート」を訪問した者が散見された。レンタサイクルを活用したケースが多かったことは、萩の主要観光施設が自転車で巡れる範囲に展開をしている証左である。

この日は、翌日に訪問を予定している津和野までの山口線が豪雨災害の影響で運転を見合わせていたため、筆者は受講生の引率を大学院生に依頼して先に益田へ戻り、益田駅や観光協会で情報収集と代替ルートの模索に励んだ。もし21日に山口線が運休ならば、翌日9:30にホテル前で解散することに決め、それを夕刻のホテル前でのミーティングで伝えた。

なお、このミーティングの際、事前配布していたフィールドノートを予告なく突然に提出させた。フィールドノートの活用はかなり低調で、出雲大社、石見銀山、萩の全てを記せていた者はわずか2名（加点3点）、1地区または2地区を記した者が2名（記載内容に応じて加点2点または1点）

だった。ノートを提出できたが全く記入の無い者が6名（加点無し）、自宅かホテルの部屋に置いたままで萩にフィールドノートを持参できていない者が7名（加点無し）もいて、筆者はその不甲斐なさに唖然とした。地理学を専門とする学生が1名しか居なかったとはいえ、この結果から判断すると、毎年前期に開講している「地理学概論」のフィールドノートの書き方や効用の教育を一層強化する必要があることは明白である。

コロナ以前には、2日目の夜は反省会を兼ねた打ち上げコンパで楽しく過ごしていたのだが、こうした時間は2019年度8月に実施した「地理学研究」で会津地方を訪問したのが最後である。今年度は昨年度よりも状況が芳しくなく、社会情勢に鑑みて外食や部屋間の往来も厳しく禁じたため、受講生は各自の部屋で夕食の後、現地課題の整理や清書に勤しんだはずである。

#### 4.3 第3日目（8月21日（土）、津和野町の最高気温29.0℃、11:10）

前日夜からJR西日本の山口線の運転情報が更新されなかったため、筆者は早起きして山口線の始発列車が定時運転されているのかを益田駅まで確認しに行った。始発列車の運転士に質問すると（益田駅の窓口は営業時間外）、「本日の山口線は全線で定時運転の予定です」との頼もしい返答が得られた。その情報を携えて、筆者はホテルの自室に戻り、教務システムを介して受講生へ「本日は当初予定通りに行動」との情報を発信した。

集合時に現地課題2点を提出してもらうため、この日の集合はホテル前に8:30とした。なお、最終日となるこの日を含めて、現地では毎朝の集合時に健康申告・観察を実施し、非接触型体温計も持参した。第3日目の行動計画は次のとおりである。

益田8:58（スーパーおき1号）9:30津和野、津和野町日本遺産センター、重要伝統的建造物群保存地区、藩校養老館を見学、藩校養老館にて11:30現地解散、以後は自由行動

津和野も訪問すべき場所が多くあるが、社会情勢に鑑みて団体行動を極力抑制するのを感じ、津和野市街地を団体で行動する時間は当初より短めに設計した。津和野での現地課題は、2年前から恒例化している「最終訪問地（今回は津和野）の風情について、季語を含めた1つの俳句に詠む」というものにした。各地の歴史・文化・地理が凝縮された地域の風情は、長々としたレポートよりも俳句にまとめた方が強く滲み出るような気がする。本学は初等中等教育の教員を育成するのが主たる使命であるので、いずれの校種においても教科指導だけでなく国語能力の高さが不可欠である。

さらに、解散後も旅を続ける受講生（今年度は昨年度に続き皆無に近かったと推察する）にとっては、俳句であれば本文直接書き込みでスマートフォンから当日中に送信できる利点もある。この課題は受講生にも好評なうえ、現地授業の間も怠惰な雰囲気が生じにくい。それゆえ今後しばらくは継続していく予定である。

### V. 授業内での課題取組状況にみる今後の展望一むすびに代えて一

本章では、今回の授業の中で受講生に取り組んでもらった課題において、提出物から各々の課題に対する改善の余地を模索する。



## 5.1 事前課題

本稿の第Ⅲ章に記したように、事前学習（自学自習）と事前学習会（対面実施）では、①文献を精読してのキーワードの選定と文献要旨の作成、②2つの対象地域における地形図の新旧比較を中心とした地形図読図作業、③上記①の作業結果を推敲・編集した『文献要旨集』を活用した文献学習、これらの3点に取り組んでもらった。本節では、これらの作業を経て提出された成果物からみえてくる「地理力」増進のための改善点を簡潔にまとめる。

まず上記①については、大部分の受講生が適切にまとめていたが、ごく一部に不適切なキーワード、規定分量を超過した文献要旨、単なる感想文のような文献要旨が散見された。キーワードについては、卒業論文執筆の段階から意識して適切なキーワードを挙げることに慣れておくのが望ましい。汎用的に過ぎるもの、特殊かつ使用頻度が極端に低いもの、「○○的な◇◇」のように形容詞句を伴うものは総じて不適切なキーワードである。

次に上記②については、本稿の第Ⅲ章第3節および同第4節で既述の通り2つの設問を提示した（表1、図1、図2）。問1は等高線を活用して起伏や傾斜を読み解く設問、問2は新旧地形図の比較によって土地利用の特徴や変化を読み解く設問である。これらのうち問2は出題ミスがあったため、本稿には修正済みのものを載せた（表1、表3）。問1では約8割の正答率が得られた。このことは、本学と同程度の難易度にある大学であれば、仮に高等学校で「地理」を履修していなくても対応できることを示している。大学の授業で等高線の読み取りを教える際は、縮尺によって等高線（計曲線および主曲線）の間隔が異なること、尾根と谷を正しく見極めるコツを伝授すること、自然と人文を絡めた設問への対応、これらに腐心しておく必要があるだろう。

事前課題の最後は上記の③について述べる。これは、推敲後に簡易製本した文献要旨集を受講生に渡し、それをもとに訪問予定地域（出雲大社、石見銀山、萩、津和野）各々の文献群（ただし、自身の担当文献を除く）から、最も熟読したい文献とその理由を報告してもらう課題である。この課題をこなせば、受講生は訪問地域の全てについて広範かつ深い知識を効率良く身につけることができる。もちろん、文献選択の理由の記述内容は事前学習の評価材料として活用した。

## 5.2 現地課題と事後課題

現地授業における課題は前章で既述の通り、①石見銀山の更なる活性化のための提案を400字詰原稿用紙マ1枚にまとめる（前章第1節）、②萩での自主行動でハーフデイトリップを設計のうえそれを実践し記録をレポートとする（前章第2節）、これら2点を課した。その他、加点対象としてのみの扱いで減点対象とはしなかったが、第2日目の行動を終えた時点でフィールドノートを一時的に回収して記載内容を精査した。また、同様に加点のみの事後課題として、前章第3節で触れた「津和野の風情について、季語を含めた1つの俳句に詠む」を課した。

現地課題①については、交通機関の乱れにより龍源寺間歩を訪問する余裕が無かったため、重伝建地区である大森地区やその周辺に関わる記述が多かった。受講生の関心は町並みを構成する個々の建造物の景観よりも、同地区内における飲食店や土産物店などの営業店舗にあることも分かった。このことは、誘客をはじめとする地域振興を考えるうえで大いに参考にすべき事柄であろう。もちろん、景観保全を軽視するような地域振興策は本末転倒なので避けるべきである。

現地課題②に関しては、既述の通り大多数の受講生がレンタサイクルを利用してルート設計と

実践に励み、旧市街地内部の主要観光スポットをほぼ全員が巡っていた。今回はコロナ禍の下で山口県が県外からの観光客に来県自粛を要請している中での訪問だったため、香川（2011）をもとに訪問が予想される施設等と事前に入念な打ち合わせをしておいた。それが奏功したのか、多くの受講生から「大歓迎していただけて感激した」との声が漏れた。ただ、第2日目の宿舎帰着後に予告なく提出させたフィールドノートに関しては、前章第2節に記したように低調だった。

事後課題の俳句については、解散当日の深夜 23:55 の締切に全員が間に合い、しかも一人1編に限らず総数で32句（筆者が詠んだ3句を合わせると35句）が寄せられた。それを整理すると次頁の表4のようになる。最後の3句は筆者による句で、それ以外は受講生が詠んだ句である。これらを使っての加点方法は、表4をEメール添付で受講生全員に送信し、全ての句の中から各自にトップ3を選んでもらい、選を得たポイントの高さで最大3点の加点をした。

以上のようにCOVID-19感染拡大に配慮することが強く迫られる環境の下での「宿泊を伴う野外実習」の実施は、その計画立案の段階から旧来の手続きにはない諸対応を余儀なくされる。感染抑止の観点から宿舎をシングルルームで用意するのは必須であり、屋内でのミーティングも実施が難しい。しかし、現地訪問で当該地域の様子や雰囲気を感じ、その地域で現地調査をする地理学の研究技法は、バーチャルフィールドワークでは得られないものを多々含んでいる。今後も当面は従前のような現地訪問は困難であろうが、最近時折感じられる「バーチャルの方が楽で効率的」という風潮は、地理学の特徴を鑑みれば斯学の発展のためには望ましくなからう。

表4 津和野をテーマにして当日詠まれた俳句

課題として提出された俳句 (津和野で解散の後、当日23:55までに送信されたもの)	含有要素			
	(津)	(固)	(文)	(般)
秋梅雨を 集めてはやし 高津川		●		
学び舎に 涼みもたらす 夏の川				●
晩夏の候 静かな街を 照らす星				●
鷺舞の 風情受け継ぐ 津和野町	●		●	
涼し風 川沿いを舞う 鷺と鯉			●	
静けさに 茶色の街並み 鳴る風鈴				●
鯉と子の 隔てなき溝 水遊び			●	
秋近し かぜたつわの道 (風立つわの道) 飛ぶ帽子	●			
草茂る 風吹き織りなす 自然の音				●
津和野川 滴る鮎焼く 夏の夜	●			
黒蜻蛉 誘う町は 小京都				●
鷺舞や 古偲ぶ 小京都			●	●
石畳 歩いていると 蟬鳴けり				●
津和野酒 鮎の塩焼き 優勝だ	●			
養老館 夏の道場 懺悔の間		●		
白鷺の 舞が伝えし 過越し方			●	
夏の雨 津和野の里に 消え失せる	●			
津和野路に 揺れる緑と 踊る鯉	●		●	
涼風に 彩られるや 白い壁				●
学び舎に 涼しい風吹く 養老館		●		
暑い日に 楽しく泳ぐ 鯉の群れ			●	
街並みに 浴衣が似合う 小京都				●
風鈴の 音はね返す 石畳				●
青野山 顔出す紅葉 いや鳥居		●		
踏み入れば 城下に響く 蟬の歌				●
処暑の日に 掘割泳ぐ 鯉の道			●	
静けさに 清水せせらぐ 高津川		●		
新涼に 情趣溢れる 養老館		●		
黒鯉や 先人が為に 空望む				●
夏の夜に 白鷺の舞う 社かな			●	
栄えにし 津和野の城に 生ゆる青葉	●			
百枚の 絵が伝えたり 津和野かな	●			
津和野まち 老婆の会話に 秋の季語	●			
鯉泳ぐ 水面を渡る 処暑の風				●
夏酒を 干して初陣 津和野旅	●	●		

## 【構成要素の凡例】

- (津) 地名として「津和野(つわの)」を含むもの
- (固) 津和野にある事物や地域名などの固有名詞を含むもの
- (文) 津和野化に伝わる文化や風土に関する語を含むもの
- (般) 津和野に適合する一般的・汎用的な語を含むもの

## 謝辞

コロナ禍のなか、県外からの訪問客である我々一行を快く受け入れてくださった訪問地域の皆様に心より感謝申し上げます。また、出雲市教育委員会指導主事の片岡千修様、大田市教育委員会指導主事の山崎 勲様、萩市教育委員会指導主事の山本淳一様には、各市の小学校社会科の副読本をご提供いただきました。なお、本稿の骨子については、帰洛翌日に催された2021年度日本地理教育学会大会（2020年8月22日、オンライン開催）において報告しました。

## 引用・参考文献（対象地域に関する文献は別稿（香川：2022a, 2022b）を参照）

出雲市教育委員会（2020）『出雲—わたしたちの出雲市—』（令和2年4月1日改訂，第6版）。

大田市教育委員会（2019）『わたしたちの大田市』（平成31年4月日発行，第10版）。

香川貴志（2011）歴史的遺産の「まちづくり」への応用から学ぶ—津和野、萩、石見銀山を巡るフィールドトリップ、平成2（2010）年度「地理学特講（地理学臨地実習）」の覚え書き—。京都教育大学教育実践研究紀要，**11**，pp. 1-11.

香川貴志（2021a）重要伝統的建造物群保存地区を活用した教材作成のための事前学習の記録—中山道妻籠宿，奈良井宿，木曾平沢に関する文献研究—。『京都教育大学環境教育研究年報』，**29**，pp. 1-12.

香川貴志（2021b）COVID-19拡大抑止の環境下におけるフィールドワークの実践—中山道妻籠宿，奈良井宿，木曾平沢における2020（令和2）年度「地理学特講」の実施とその工夫—。『京都教育大学環境教育研究年報』，**29**，pp. 13-28

香川貴志（2022a）出雲大社，石見銀山，萩と津和野を巡るための文献研究の記録—近年に著された対象地域の地理学関連文献の要旨（第1報）—。『京都教育大学環境教育研究年報』，**30**，pp. 57-72.

香川貴志（2022b）出雲大社，石見銀山，萩と津和野を巡るための文献研究の記録—近年に著された対象地域の地理学関連文献の要旨（第2報）—。『京都教育大学環境教育研究年報』，**30**，pp. 73-86.

萩市教育委員会（2019）『わたしたちのふるさと 萩』（平成31年4月1日発行，第7版）。